甲陽軍鑑における武田武士の死の位置づけにみえる安全・危機管理思想

奥津 康祐

一　甲陽軍鑑について

1　構成・内容

甲陽は甲斐国、軍鑑はいくさのかがみであり、主として甲斐国の戦国大名である武田信玄・勝頼二代の軍事を記載した書物である。本稿で底本とした甲陽軍鑑大成の本文篇上下（第一巻・第二巻）[1] では、甲陽軍鑑は本編全二〇巻（巻一～巻二十）、末書四巻（上巻、下巻上、下巻中、下巻下）からなっている。甲陽軍鑑内の表記あるいは説明によれば、著作者は主として高坂（こうさか）弾正であり、高坂の重病化・死後に相当する二十巻の全部および下巻下の途中以降のみ高坂の甥の春日惣次郎である（本稿の引用部以外での人名・地名表記も原則として甲陽軍鑑に従う）[2]。なお、春日の死および死後の記載もわずかながらあるが、この部分の著者は記載されていない。巻一にある目録の末には、高坂弾正が長坂長閑（ちょうかん）、跡部大炊助（おおいのすけ）両名に対して記したことが記され、信玄

の初陣から死までの三八年間の「信玄公御一代のことわざ、おほかた書しるす（記）」として、「このりくつ（理屈）をとりて、勝頼公御代のたくらべ（たくらべ）になさるべき也」と結んでいる。また、各巻末等にある奥書の日付が「天正三年乙亥六月吉日」であるものが多くある。これは三河国長篠合戦の直後である。高坂による当初の著作の意図が、勝頼の太鼓持ちのごとく描写されている長坂・跡部両者を通じ、長篠合戦で大敗した勝頼に信玄の成功事例との比較で反省を促すことにあることがわかる。

2　記載対象の時代背景

武田氏は、信虎期に甲斐国を統一したが、甲陽軍鑑によれば天文七年、嫡子の信玄（当時は出家前で諱は晴信。本稿では引用部を除き信玄に統一する）が信虎を国外に追放し家督を継ぐ（巻一・I-57：＊以下出典は、甲陽軍鑑の該当巻に加え、甲陽軍鑑大成の該当部分の巻数（ただし、見やすさのためローマ数字）-記載初出ページ数で表記する）。信玄は諏訪、村上、小笠原、木曽氏らを下して信濃国の大部分を制圧し、長尾（上杉）、今川、北条、徳川、織田氏らと戦いながら上野、飛騨、越中、駿河、遠江、三河、美濃の各国にも領域を拡大していく。信玄は天正元年に病死し、子の勝頼が（実質上）後を継ぐ。勝頼は天正三年の長篠合戦で織田・徳川連合軍に大敗するも、信濃国最北部や上野国東部では領域を拡大するなどして持ちこたえたが、天正一〇年に織田・徳川両氏から攻め込まれ、甲斐国田野で討ち死にし、武田家は滅亡する（甲州崩れ）。

3　著作者

高坂弾正はもとは甲斐国伊沢（石和）の農民で、一六歳の時、父の遺産をめぐる裁判に負けたところを信玄に取り立てられ、その後信濃国北部にある海津の高坂家を継ぎ、海津城を任されるほどの武将となった。高坂は「に（逃）

げ弾正」とわらべ歌で歌われるほど臆病者という評価が出たり、「あのやうなるほれ者を御とりたての儀、偏に信玄公御目違也」と陰口を言われたりすることもあったが、海津城で大敵上杉謙信（長尾景虎・上杉政虎・上杉輝虎）の抑えを任せられるようになると、その評価が「分別有」と変わっていった（巻二・I−65）。要するに、慎重な性格だった高坂は、若く地位が低い頃は臆病者と呼ばれ、大敵の抑えを果たす頃になると分別者という評価をされたのである。高坂は信玄について、「万事に調りたる名大将」（巻六・I−164）、「遠慮のふかき名大将」（巻十二・I−375）というように、完璧で遠望深慮の主君という評価をしているが、永禄一二年の小田原攻めに関しては、戦前、敵の北条氏の勢力は小さくなく、かつ、戦闘意欲も高いであろうことなどから「おぼし召とゞまり可レ被レ成」信玄に直接意見し（巻十二・I−384）、戦後は、信玄から小田原攻めの「勝利ハいかん」と聞かれた際、「御かちなされて御けが也」と危険な勝利だったと答え、批判の意思を最後まで通した（巻十二・I−393）ように、信玄を絶対視しているわけではない。高坂は長篠合戦時は海津城に居残っており（巻十九・II−117）、戦後も生存宿老として武田家を支えたが、天正六年に病死する（巻二十・II−142）。その勝頼に対しては、代交代直後の格別の活躍について「御代がわりに、とぶ鳥もおつるほどの勝頼公御いせいなり」（巻十九・II−105）、「信玄公より、勝頼公の御弓矢ましたまふ」（巻十九・II−106）といった領国内の好評判を記しつつも、内藤修理とともに「やがて信長・家康両旗を相手に被レ成、勝頼公無里なる御一戦とげられ候ハヾ、めん〳〵かたゞ〳〵ミなうちじに候て、其後は、武田の家めつぼううたがひなし」とはばかりなく言上するなど（巻十九・II−106）、その向こう見ずな強さを公然と危ぶんでいた。そして長篠合戦後は、信玄より「つよくはたらかんとあそバし、つよみをすごして、おくれをと」った、「つよすぎて、国をやぶ」ったとの評価になる（巻六・I−164）。「つよすぎたる大将」の例として勝頼をあげ、「つよすぎたる大将の作法ハ、ゑんりよもせず、なに事をもつよみとばかりあそばす」（巻六・I−153）として、信玄とは対照的に「つよす

ぎ」「遠慮」がないという評価である。

春日惣次郎は高坂が訴訟で負けた高坂の姉夫婦の子だが、それでも高坂からは「ねんごろ」に扱われていた（下巻上・Ⅱ-328）。高坂家は高坂弾正の子が継ぎ、甲陽軍鑑上、春日には武将としての活躍の記録は見当たらない。甲州崩れの際、所用で越中国にいたため流浪することとなったが、佐渡国に定着し、天正一三年に病死する（巻二十・Ⅱ-194）。春日は、勝頼が「信玄公の御時わが先を仕るに、つゐ（遂）にあぶなげもなく候つる。勝頼ごとくに先をするもの候ハゞ、長しの（篠）にて、敵にしやくの（尺）木を三ゑ（重）の事ハおき、十ゑゆわれ候ても、まけ（負）まじきものを、はやく信勝を大将にして、勝頼ハかしら（頭）をそりく（剃）づし（崩）、家老のごとくになりて、先を仕るべき」（尺の木は逆茂木）と言ったことについて、「勝頼公、大かた（方）ならぬつよき御大将のゆへ（故）なり」と評している（巻二十・Ⅱ-167）。その他、増水した川を騎馬で先頭に立って渡ろうとしたところ、ついて行こうとした徒歩の兵がことごとく流され死んでしまった話（巻二十・Ⅱ-159）などで、勝頼の大将というよりは一武将としての「つよすぎたる」姿を認めている。その他、わいろにふけり国を危うくする長坂・跡部（巻二十・Ⅱ-155）の意見に様々引きずられたり、有能の士を不当に成敗する（後述）といった暗君の姿も描いている。

4　真贋論争

江戸時代中期以降、甲陽軍鑑をめぐっては偽書説が出て、明治時代に入りそれが定説化した観を呈したが、昭和四〇年頃から高坂弾正・春日惣次郎を著作者、江戸時代の軍学者尾畑勘兵衛（小幡景憲）を伝写本の整理者とする見解も広まり、各種偽書説の欠陥とともに、言語学方面からも偽書とは考えにくいことなどが解明されてきており、[3][4][5] 甲陽軍鑑大成の編者である酒井は偽書説を「甲陽軍鑑誹謗の先行書にひかれた妄説」と断ずる（Ⅰ-8）。なお、本稿著者は実証史学あるいは言語学的探究は専門外であり、その点からの検討は能力を超

えているが、ただ、安全・危機管理思想という点、本稿で示すように十分体系的な内容となっており、事実関係も多くの部分で具体的かつ合理的であることから、高坂弾正・春日惣次郎著作者説を支持している。確かに年次その他明確な誤りが各所にあるが、記憶をもとに事実関係を整理していくという医療事故調査（本稿著者の専門）の視点を借りれば、医療記録のような記録に基づかず、当事者のかなり昔の記憶をまとめる作業でこの程度の誤りが生じない方が尋常ではない。数十年間の記憶による記録という前提で見れば信用性がむしろ極めて高い。後代の加筆・修正・攙入も所々あるであろうが（明白な例として「大坂両御陣」（巻十二・I-396））、甲陽軍鑑自体が部外者による完全な創作であるという可能性こそあり得ない。

二　武田武士の死の描写

甲陽軍鑑では様々な武田武士の死が記載されている。本稿では、その内容により、① 大切な亡骸となる死、② 戦功としての死、③ やむを得ない死、④ 組織に穴を開ける死、⑤ 代替わりとしての死、⑥ 日頃の部隊管理がしのばれる死、⑦ 武士としての意地を大切にした死、⑧ 報いとしての死、⑨ 悪口・喧嘩・怠慢を理由とした成敗による死、⑩ 不覚の死、⑪ その他（意味づけ不明のものを含む）に分類する。分類を一覧にしたものが表である。以下、各分類についてそれぞれ代表例を挙げる。

① 大切な亡骸となる死

まず、信玄の弟である武田典厩（信繁）を挙げる。典厩（信繁）は川中嶋合戦で上杉軍の攻撃を受け討ち死にするが、その首は敵に取られた後、部下が取り返し、甲府に戻っている（巻十一・I-338）。戦後、上杉軍の

	没年	名	死亡形態	備考	甲陽軍鑑大成の出典	分類
1	享禄 4	今諏訪五郎左衛問	病死		I-298	⑪
2	享禄 5・天文元	野村源左衛門	刃傷沙汰	事件後長刀禁制	I-165	⑪
3	享禄 5 ～天文 2	荻原常陸	老衰？	信虎の弓の師	II-24	⑪
4	天文 2	白畑助之丞	殺害	相手を見くびる	II-44	⑩
5	天文 7	今井一郎	討死	にら崎合戦	I-208	②
6	天文 13	諏訪頼茂	成敗	降伏出仕後	I-231, II-345	⑪
7	天文 14	荻原九郎次郎	討死	塩尻合戦	I-240	②⑦
8-13	天文 14	ををくま豊前、山上六郎左衛門、古川宮内右衛門、やぎはら新蔵、なるげ又左衛門、他一名	討死	塩尻合戦	I-240	②
14	天文 15	甘利備前	討死	戸石合戦	I-149, 248, 251, II-26, 376, 424	③⑤⑥
15	天文 15	横田備中	討死	戸石合戦	I-149, 248, 251, II-20, 162, 424	③
16	天文 15	川上入道	成敗	戸石合戦の不審行動	I-249	⑨
17	天文 16	板垣信形	討死	上田原合戦	I-270, 274, II-53, 376, 424	②③⑩
18	上田原後	たゞらい五左衛門	成敗	手柄なく悪口	I-157	⑨
19-20	天文 16	赤口関左門、寺川四郎右衛門	成敗	喧嘩	II-39	⑨
21	天文 16	武笠与一郎	成敗	悪口	II-41	⑨
22	天文 19	小幡惣七郎	戦傷で死亡	うんのだいら合戦	I-293	②
23	天文 21	小山田古備中	討死	時田合戦	I-309, II-376, 424	③
24-25	天文 21	栗田左衛門、小山田左衛門尉	戦傷で死亡	時田合戦	I-309	⑤
26	天文 21	志村金助	討死	時田合戦	II-45	⑪
27-28	天文 23	がくがん寺、ぬのゝ下	切腹	越後と内通	I-318, II-377	⑦⑧
29-30	天文 23	より、和田	切腹	越後と内通	I-318	⑦⑧
31	弘治 3	長沼長介	討死	みか尻合戦	II-52	②
32	永禄 3	土屋平三郎	暗殺	落合彦助事件	II-24, 60	⑪

	没年	名	死亡形態	備考	甲陽軍鑑大成の出典	分類
33	永禄 3	勝沼五郎	成敗	武蔵と内通	I-332, 474	⑧
34-36	永禄 3	仁科、うんの、高坂	成敗	越後と内通	I-334	⑧
37	永禄 4	辻六郎兵衛	討死	わりがたけ城攻め	II-74	②
38	永禄 4	小幡山城	病死	川中嶋 2 か月前	I-188, 209, 335, 356, 361, II-23	④⑤
39	永禄 4	武田典厩（信繁）	討死	川中嶋合戦	I-338, 359, 478, II-148, 344, 396, 424, 479	①③
40	永禄 4	諸角豊後	討死	川中嶋合戦	I-194, 338, II-396, 424	①③
41	永禄 4	山本勘助	討死	川中嶋合戦	I-81, 338, 352, 356, 521, II-22, 277, 396, 424, 431	③⑤
42	永禄 4	初鹿源五郎	討死	川中嶋合戦	I-338, II-396, 424	③
43	永禄 4	三枝新十郎	討死	川中嶋合戦	II-396, 424, 456	③
44	永禄 4	落合彦助	討死（敵方）	川中嶋合戦	I-485, II-60	⑧
45	永禄 4	増城源八郎	成敗	悪口	II-46	⑨
46	永禄 5	日向藤九郎	討死	松山城攻め	I-340	⑩
47	永禄 6	城忠兵衛	討死	みのわ城攻め	I-351	②
48	永禄 6	栗原藤三郎	討死	みのわ城攻め	I-359	⑪
49	永禄 6	多田淡路	病死		I-356	⑤
50	永禄 7	甘利左衛門尉	事故死	久しき怨霊	I-192, 250, 356, II-26	⑪
51	永禄 7	原美濃	病死		I-194, 356, 358, 472, II-22	⑤
52	永禄 8	飯富兵部	成敗	義信事件	I-118, 182, 356, II-22, 23, 24, 45, 85, 353, 356, 375, 376, 470	⑧
53	永禄 8	長坂源五郎	成敗	義信事件	I-94, 118, 182, 357, II-65	⑧
54	永禄 8	古屋惣次郎	成敗	義信事件	I-120, II-292	⑧
55	義信成敗 1 年以前	曽根周防	成敗	義信事件	I-182, 357, II-292	⑧
56	永禄 10	武田義信	自害	義信事件	I-117, 292, 358, 367, 417, 510, II-291, 338, 346, 353, 376	⑧

	没年	名	死亡形態	備考	甲陽軍鑑大成の出典	分類
57	永禄 12	本郷八郎左衛門	討死	さつた山合戦（奥津対陣）	I-188, 292, 407, II-30	⑪
58	永禄 12	小幡信氏	討死	神原城攻め	II-378, 406, 424, 510	②③
59	永禄 12	浅利式部	討死	三増合戦	I-191, 391, II-93, 424	③⑥
60	元亀元	落合治郎	討死	花沢城攻め	I-400	①
61	元亀 3	小宮山丹後	討死	ふたまた城攻め	II-177	⑪
62	元亀 3	小幡昌定	討死	味方が原合戦	II-378, 424	③
63-65	元亀 3 ～ 4	松沢源五郎、小田切与助、林甚助	急死（狂気・てんごうかき・落馬）	希庵殺害	II-508	⑧
66	天正元	武田信玄	病死	「かく」を患う、希庵殺害	I-36, 69, 72, 201, 206, 446, 488, 514, II-20, 94, 95, 100, 101, 102, 116, 120, 126, 129, 132, 156, 281, 282, 312, 339, 373, 382, 390, 401, 403, 404, 424, 435, 470, 503, 508	①④⑤⑧
67	天正 2	岡部治部	討死	高天神城攻め	II-105	②
68	天正 3	山形三郎兵衛	討死	長篠合戦	I-161, II-114, 284, 385	①②
69-70	天正 3	真田源太左衛門、真田兵部助	討死	長篠合戦	I-513, II-28, 137, 114, 378, 435	②
71	天正 3	土屋右衛門尉	討死	長篠合戦	II-25, 114	②⑦
72	天正 3	馬場美濃	討死	長篠合戦	II-22, 114	⑦
73	天正 3	笠井肥後	討死	長篠合戦（退却戦）	II-116, 385	②⑦
74-77	天正 3	内藤修理、原隼人佐、望月、安中左近	討死	長篠合戦	II-116	⑪
78	天正 3	横田十郎兵衛	討死	長篠合戦	II-116, 162	⑪
79-82	天正 3	武田兵庫、名和無理介、井伊弥四郎衛門、五味与三兵衛	討死	長篠合戦（とびがす）	II-117, 284	⑪
83	天正 3	山本勘助の子	討死	長篠合戦	II-22	⑪
84	天正 3	多田久蔵	討死	長篠合戦	II-28	⑪
85	天正 3	土屋新之丞	討死	長篠合戦	II-116, 312	②⑦

	没年	名	死亡形態	備考	甲陽軍鑑大成の出典	分類
86	天正 3	三枝勘解由左衛門	討死	長篠合戦	II-137, 435	⑪
87	天正 3	名古屋将わう	討死	長篠合戦	II-464	⑪
88	天正 3	秋山伯耆	処刑（敵方）	岩村城陥落	II-120	③
89	天正 6	高坂弾正	病死	「かく」を患う	II-142, 149, 155	④
90-91	天正 7	三浦兵部、向井伊賀	討死	持舟城陥落	II-157	⑪
92	天正 8	原隼人之助	戦傷で死亡	膳城攻め	II-166	⑩
93	天正 8	林平六	討死	膳城攻め	II-166	②
94	天正 9	岡部丹波	討死	高天神城陥落	II-168	⑪
95-103	天正 9	長谷川左近ら 9 人以上	討死	持舟城防衛戦	II-169	⑩
104	天正 10	小宮山内膳	生害	甲州崩れ（田野）	II-177	②⑦
105	天正 10	土屋惣蔵	討死	甲州崩れ（田野）	II-177	②⑦
106	天正 10	武田勝頼	討死	甲州崩れ（田野）	II-177, 180, 187, 188, 193, 507, 508, 509	①②⑦
107	天正 10	阿部加賀	討死	甲州崩れ（川ばた）	II-177	②⑦
108	天正 10	小原丹後	切腹	甲州崩れ（田野）	II-177	⑦
109	天正 10	武田信勝	討死	甲州崩れ（田野）	II-177, 507, 508	①②⑦
110-148	天正 10	秋山紀伊ら 39 人	討死等（生害）	甲州崩れ（田野）	II-177	⑦
149	天正 10	跡部大炊助	殺害	甲州崩れ（諏訪）	II-180, 182	⑧
150	天正 10	武田勝用軒	殺害	甲州崩れ（甲府たて石）	II-180	⑪
151-153	天正 10	小山田兵衛、武田左衛門佐、小山田八左衛門	殺害	甲州崩れ（甲斐善光寺）	II-181	⑧
154	天正 10	小菅五郎兵衛	殺害	甲州崩れ（甲斐善光寺）	II-181	⑧
155	天正 10	一条右衛門大夫	殺害	甲州崩れ（市川）	II-181	⑪
156	天正 10	秋山内記	殺害	甲州崩れ（高遠）	II-181	⑪
157-158	天正 10	長坂長閑とその子	殺害	甲州崩れ（一条館）	II-181, 182	⑧
159	天正 10	武田典厩（信豊）	殺害	甲州崩れ（小室）	II-181, 507, 508	①
160	天正 10	武田典厩（信豊）の子	殺害	甲州崩れ（小室）	II-181	⑪

	没年	名	死亡形態	備考	甲陽軍鑑大成の出典	分類
161	天正 10	大熊備前	殺害	甲州崩れ（伊奈）	II-181	⑪
162-164	天正 10	仁科五郎、小山田備中、渡辺金太夫	討死	甲州崩れ（高遠）	II-181	②⑦
165	天正 10	高坂源五郎	殺害	甲州崩れ（川中嶋）	II-181	⑪
166	天正 10	山県源四郎	殺害	甲州崩れ	II-181	⑪
167	天正 10	穴山梅雪	落ち武者狩り	本能寺の変	II-184	⑧
168	天正 13	春日惣次郎	病死	「しやく」を患う	II-194	⑪
169	信虎期	くどう	成敗	信虎手打ち	I-94, II-110	⑪
170	信玄期	北地五郎左衛門	自刃	大場の不正への抗議	I-197	⑪
171	信玄期	大場民部左衛門	成敗	訴訟の不正	I-197	⑨
172	信玄期	萩原助四郎	成敗	怠慢	I-292, II-30	⑨
173	信玄期	平野久助	刃傷沙汰	悪口がもとで喧嘩	I-482	⑨
174	信玄期	さいか某	刃傷沙汰	かもらと喧嘩	II-26	⑪
175	信玄期	福田	刃傷沙汰	多田久蔵に返り討ち	II-28	⑧
176-178	信玄期	かも十兵衛、山下甚介、安沢彦助	成敗	喧嘩	II-29	⑨
179	信玄期	長沼長右衛門	殺害	長沼兄弟が仇討ち	II-46	⑪
180	信玄期	板垣弥二郎	殺害	越後と内通後喧嘩	I-311, II-29, 30, 59, 452	⑧⑩
181	勝頼期か	秋山源蔵	病死		II-25	⑪
182	勝頼期	加藤駿河	？		II-34	⑪
183	勝頼期	武田信虎	老衰？		II-109	⑪
184	勝頼期	孕石忠弥	成敗	少しの過失	II-155	⑪
185	勝頼期	曽根与市之助	成敗	何の罪もない	II-155	⑪
186	勝頼期	落合市之丞	成敗	勝頼に重用されず	II-155	⑪
187	勝頼期か	横田彦九郎	？	過にて死	II-456	⑪
188	勝頼期	多田治部右衛門	討死	飛信国境	II-510	⑪

大将上杉「てるとら（輝虎）」は「舎弟てんきうなどのくび（首）を、信玄衆にそのば（場）におゐてとりかへされ、しばひ（芝居）をふま（踏）へられ候事ハ、てるとら大きナルまけ（負）にきわまり候」と述べたと記載がある（巻二十・Ⅱ-148）。この点、敵の大将の発言をどのように知ることができたか疑問があるが、てるとらの真意はさておき春日の思いが代弁されたと考える方が自然であろう。勝利の重要な要件として、戦後もその場に残る（芝居を踏む）ことの他、奪った重要な敵武将の首を取り返されないことも含まれていることがわかる。長篠合戦における山形三郎兵衛も、討ち死に後、山形の奉公人である志村が首を挙げて甲府に持ち帰っている（巻十九・Ⅱ-114）。主の討ち死に時に首を挙げて持ち帰ることが奉公人のよき手柄五か条の一つとして挙げられ、例としてその志村の例が記載されている（下巻中・Ⅱ-385）。長篠合戦については、「敵にげ（逃）入りたるにより、三重ノ尺の木二重迄やぶり（破）、皆討死するトいへ共、そこニてくび（首）とられたるハ、壱人もなし。」「死人ハ山形ヲ初メ上下共ニくびをあげ甲州へ帰ル」とあり（上巻・Ⅱ-284）、大惨敗であっても、敵の防衛ラインである三重柵内等で討ち死にしながら敵に首を取られなかった事実によって一方的な敗戦ではないことを強調しているものとみられる。ちなみに、武田家滅亡三か月後に信長が本能寺で横死した際、甲斐国の支配を任されていた織田家の川尻与兵衛を甲斐国の百姓・町人が殺し、その首を山形源四郎被官の三井弥市郎が挙げたという記載がある（巻二十・Ⅱ-186）。武田旧臣の武士が敵の大将の首を挙げたことで武田家の勝ちを感じとろうとする春日の思いがうかがわれる。①の最後に信玄を挙げる。信玄は「諏訪（具足着）すわの海へぐそくをきせて、いまより（今）三年め（目）、亥の四月十二日にしづめ（沈）候へ」と遺言したが（巻十三・Ⅰ-449）、「家老衆談合之上」取りやめとなった（巻十三・Ⅰ-452）。信玄としては諏訪家から武田家を継いだ勝頼への何らかの配慮があったかもしれないが、家老衆としては信玄の遺言に逆らってでも通常の形で弔いたかったのであろうか。

② 戦功としての死

甲陽軍鑑は死に際の脚色が全くと言ってよいほどないのが特徴である。平家滅亡が決定的となっても敵を次々と薙ぎ払い舟を飛び回って源義経を追い詰める平教経（平家物語）、討ち死にの際に自ら首をはねて地中に埋める新田義貞（太平記）といった軍記物語特有の超人間業の記載は極めて珍しい。歴戦の勇山形三郎兵衛であっても鉄炮で撃ち抜かれ、強すぎる大将勝頼であっても鑓で突かれ、あっさり命を落とす。概してさっぱりした戦死の記載である。②の代表例として、まず、小幡惣七郎を挙げる。小幡惣七郎は、長尾景虎軍と信濃国「うんのだいら（海野平）」にて対決した際、味方の飯富（おほ）兵部の許へ使者に出たところで敵の長尾義景方の「よき武士」と一騎打ちとなり、その武士を討ち取ったものの、深手を負って一八日後に死亡した。死後、信玄自ら焼香をし、「諸人、過分不レ浅（あさからず）と申なり」という格別の扱いを受けている（巻十・I-293）。小幡信氏は信玄期の駿河国神浦原城攻略の際に討ち死にするが、勝頼が一番に城に攻めかかる中、「勝頼公御討死あやうし」、「大将の御子息さへ如レ此」なのに「劣ルまじき」と言って乗り込んでいっていた（下巻中・II-406、下巻下・II-510）。次に岡部治部については、勝頼期の高天神城攻めの際、朝比奈金兵衛という若武者と一番に塀にとりつき落城させた、と朝比奈と岡部の功績をたたえた上、「岡部治部そこにてうちじ（討死）にする」と記載する（巻十九・II-105）。最後に、長篠合戦での土屋右衛門尉を挙げる。長篠合戦で右翼を任された土屋は、真田源太左衛門・兵部助兄弟、馬場美濃の部隊とともに織田勢に攻めかかったが、敵は柵から出てこない。そこで真田兄弟が柵を破ろうと突進するも深手を負ってしまう。その際、土屋は、「先月信玄公御とむ（弔）らひに、おいば（追腹）らをきる（切）べきに、高坂弾正に意見せられ、か様の合戦をまて（待）、と申さるゝに付、命なが（永）らへ候。只今うちじになり」、「敵出ざる故、自身かかつてさくをやぶり候」と言い柵に攻めかかり、討ち死にした（巻十九・II-114）。敵が柵から出てこず、真田兄弟も負傷したという困難な状況で、今こそ旧主信玄に命を捧げるときとばかり捨て身の突撃

をしたということであり、短い文章ながらも戦功として扱っていることをうかがわせる。

③やむを得ない死

「信玄公御敵ハ、諸方さかり（盛）の弓矢最中ノ時へ御かゝり、」「弓矢さい（最）中ノ敵なる故、合戦ごとに家老衆一二人づゝ討死也」（下巻中・Ⅱ-424）とあるように、敵が強ければ家老衆でも討ち死にが出るのはやむを得ないというのが高坂の考えである。高坂は「一二人づゝ」として、三増（みませ）での浅利（あざり）（式部）、神原城での小幡（信氏）、味方（三）が原での小幡又八郎（昌定）、板垣（逸文で場所は不明だが上田原か）、戸石（砥）での甘利・横田、信州（逸文で場所不明だが時田（常）か）での小山田古備中、川中嶋での信繁・諸角・山本・初鹿（はじかの）・三枝（さいぐさ）を挙げている。そのうち小山田古備中は、長尾政景との信濃国時田合戦で政景の大返し（総退却しはじめた後で全軍で打って返す）に遭い討ち死にしている。長尾政景は最終的には二、三騎で峠を超えて撤退するという惨敗となったが、高坂によれば峠の向こうで待機していた大将の長尾景虎が「政景をバ、うち（討）死もあれかし」と思っていたためで、政景自身は「ぶかうしや（武功者）」だと評している（巻十・Ⅰ-309）。要すれば強い敵のために討ち死にしたという文脈になる。

④組織に穴を開ける死

人がいなくなればそのポジションに穴が開く。どの時代にも通じることでありやはり甲陽軍鑑にも記載がある。まず小幡山城である。小幡は月毛（毛色が月色：クリーム色様）の馬で敵中に乗り込み、人馬とも傷だらけとなる武功を挙げ、その馬は傷がいえるとその跡が栗色になったので、若武者の間で「つきげの馬のくりげになるほど武弁おせ（を）よ」と引き合いに出される逸話をもつなど、百戦錬磨の強者であった（巻九・Ⅰ-209）。し

かし川中嶋合戦の二か月前に病死し、この時、原美濃も負傷加療中であったため、川中嶋合戦にあたり信玄は両者から作戦立案を受けることができなかった。そこで信玄は馬場民部助（後の美濃）と山本勘助の談合で決めるように指示を出し、それに応じて山本が隊を本隊と別動隊の二つに分ける作戦を上申し、それが実行に移された。結果、上杉謙信に作戦を見破られ、手薄な本隊に総攻撃を受け、典厩（信繁）の討ち死にをはじめ甚大な被害が出た（巻十一・I-335）。馬場や山本への直接の批判は書かれていないものの、文脈上、小幡・原に作戦立案を委ねられなかったことが敗戦の一因とも読み取れる。なお、その小幡は死にあたり、子らを集め、高坂を証人とし、「よくみ（身）のほど（程）をしれ（知）」という九文字の遺言をしている（巻十六・II-23）。思い上がらないという点、高坂に通じる慎重さがうかがえる。次にその高坂である。「高坂弾正、戊寅（月付・日付きれて見へず）病死する也。△天正七年己卯ノ歳より、小田原北条殿と甲州武田勝頼公と御取合あるなり」（＊（　）内は尾畑勘兵衛の記載とみられる）として高坂の病死後武田氏と北条氏の抗争が始まったという記載がある（巻二十・II-149）。長篠合戦後、高坂は勝頼に相模国小田原の北条氏との縁組を提案し、それで甲相同盟が成立した（巻十九・II-118）が、上杉謙信死後、謙信の二人の養子景虎と景勝が跡目争いをはじめた際、勝頼は景勝に買収された長坂・跡部の上申を容れ、北条氏が支持する北条氏出身の景虎ではなく景勝を支持し、甲相同盟が破たんすることになる（巻二十・II-149）。織田・徳川両氏のみならず北条氏までも敵に回し、上杉氏は弱体化して武田家の強い味方とはならず、武田家は滅亡することになるため、文脈としては、奸臣長坂・跡部の抑えとしての高坂がいなくなり、高坂が作り上げた甲相同盟が壊れ、それで武田家が滅亡する、となる。最後に信玄である。信玄はいわゆる西上作戦中、三河国吉田城の攻略途中、病状が悪化し、家臣たちを集め遺言し死亡する。死後は八〇〇枚用意している信玄の判のある紙を書状として使い、病気だが健在である旨知らせれば攻めてこないであろうと予想した上、「三年の間、我がし（死）にたるをかくして（隠）、国をしづめ（鎮）候へ」（巻十三・

I―449）と指示している。信玄は自身の死が武田家に大きな穴をあけてしまうことを自覚している。

⑤代替わりとしての死

早死にが珍しくなかった時代、死による代替わりは現代より格段に重要な問題であったに違いない。原美濃、小幡山城、山本勘助、多田淡路四名について、「信玄公御ひそう（秘蔵）のあしがる（足軽）大将衆、酉の歳より子ノとし迄四年の間に四人死て、皆わか（若）世になれども、子息供、場をひきたるほまれ（誉）、五度十度づゝあり。ゆみ（弓）矢・かんが（考）へ・つもり（積）に、こう（功）の入りたる人々多し。それによりて、あとのあく（跡）事なし」とある（巻十一・I―356）。跡継ぎに幼少、不在、無能といった問題がないこと、まして有能で組織に穴をあけないことが安心となる。次に、信玄自身について、信玄の遺言では、勝頼（四郎）の子信勝が今は七歳であるが、「信勝、十六歳の時かとく（家督）なり。其間ハ、陣代を四郎勝頼に申付候」（巻十三・I―449）と記載がある。正式な跡継ぎは信勝であり、勝頼は実質的にはともかく形式的には後見人に過ぎない。異母兄義信が謀反で自害し、諏訪家を継いでいた勝頼が事実上の跡継ぎとなっている複雑な武田家の内情を整理する二段階の代交代を指示している。ちなみに、この際、信玄はその勝頼には「合戦ずき（好）仕るべからず」とくぎを刺した（巻十三・I―450）。

⑥日頃の部隊管理がしのばれる死

まず、戸石（砥）合戦の甘利備前を挙げる。武田軍は村上義清方の信濃国戸石城攻略に向かうが、救援に駆けつけた村上義清本隊から後詰を攻撃されるとともに、前方の戸石城からも攻められ、隘地にいたため部隊展開がままならず、甘利が討ち死にするなど「すでに信玄公まけ（負）たまふ」という状況となる。最終的には、山本勘助の摩利支天のごとき活躍で村上軍を撃退するが、その過程で山本は主を失いながらも隊を保ち続けている甘利隊

に乗り込み、勝利の吉凶を伝えて鼓舞し、甘利隊を反転攻勢に導いている。「晴信公御一代になき、をくれ(遅)給ふほどの儀なり」といった敗北を認めつつも、山本の活躍、甘利隊の奮戦等の結果「かち(勝)合戦」との評価を加えている（巻九・I-246）。なお、戸石合戦については、山本の尋常ではない活躍や、上田原合戦との混同など、偽書説が生まれるゆえんとなるいかがわしい記載があるが、負けを勝ちにすっきり改ざんできていない不自然さから考えれば偽書説はかえって支持しにくいし、むしろ、嘘を上手につけない高坂の純朴な性格が垣間見られると思うがいかがだろうか。⑥の同様の例として、小田原攻めの帰路の相模国三増合戦における浅利式部があげられる。浅利は「弓矢よきかうし(巧)や(者)」である北条上総の部隊からの銃撃で討ち死にするが、「検使」（旗本の中から各部隊に派遣される者。総大将の意を得ての監督・部隊長のサポートといった役割）の曽根内匠が「けん(検)し(使)ハ此時也」と言って浅利の代行を手際よく務め、北条上総隊を押し返した（巻十二・I-390）。甘利・浅利の死亡に関し、家老衆の討ち死にであっても、その部隊は困難な状況下で、あるいは強敵に対し勝利したという記載をつけ、山本・曽根の活躍をたたえつつ、甘利・浅利の面目を保っている。主を失ってすぐ崩れてしまう部隊であれば山本・曽根の活躍もあり得なかったであろうから、甘利・浅利の日頃の部隊管理をしのぶことができるといえるのではないだろうか。ところで、春日は、高坂が生前、「国持大将の弓矢つよき・よわきハ、死後にしる(知)る」（巻二十・II-187）、「信玄公のごとくすぐれて弓矢つよきハ、二代め(目)にてよくしるゝ」（巻二十・II-194）と言っていたことを思い出し、長篠合戦大敗後も織田・徳川・北条といった巨大勢力に囲まれながら長らく威勢を保ち続けられたことは信玄の功績だと評価している。また、高坂は長篠合戦で長時間攻勢を保ち、退却時も隊を乱さなかったことについて、「かくのごとくの、味方つよき儀ハ、信玄公御他界ありて三年目にて候。みなこれ、信玄公御備定(そなえさだめ)のご威光」（下巻中・II-390）とも述べている。高坂・春日が国持大将の死後の強い影響力、裏を返せば生前の威光を重視しており、これは部隊を統率する武士についてもあて

はまるのではないだろうか。

⑦武士としての意地を大切にした死

まず、長篠合戦における馬場美濃を挙げる。馬場は敗色濃厚となった時、自らは踏みとどまりながら部下らに退却を命じたが、誰も馬場を見捨てず退却しない。そこへ一条右衛門大夫が馬を寄せ、その部下の和田が馬場に撤退を勧めたため、馬場は勝頼の退却を見届けてようやく撤退を始めたが、一条他のすべての部隊が撤退すると戦場にとって返し、小高い場所に登り、刀を抜かずに「馬場美濃にてある有ルぞ。うちておぼへにせよ」と言い放ち、敵の四、五人に鑓で突き伏せられた（巻十九・Ⅱ-114）。武士が不覚をとる際、武士の誇りに配慮して、射られた、ではなく、射させた、のように能動的な記載をするのが軍記物語でしばしば見られるが、この馬場は実際に討ち取らせた。馬場は戦前、勝頼に決戦を勧めた長坂・跡部に対し、「合戦をすゝめ申スかたぐ〳〵ハ、自然のがれ給ふ事もあるべく候。とゞめ申ス馬場美濃ハ大形うちじになり」と言っていた（巻十九・Ⅱ-115）。撤退を主張したが勝頼がそれを斥け決戦とした成り行き上、もし幸運にも勝てば勝頼の判断が正しく馬場らの判断は臆病とされ、負けて撤退すれば戦意がないから負けたと批判されてしまう状況であり、馬場は臆病でないことを示すためにも強みを見せながら死ぬしかなかったのであろう。次に甲州崩れでの勝頼を挙げる。織田・徳川氏の侵攻に際し、武将の離反が相次いだため、勝頼は本拠地の新府城を捨て小山田兵衛尉の岩どの城に撤退を図るが、その小山田にも裏切られ、田野で織田勢に追い詰められる。そこでの最期の描写は、信勝や土屋惣蔵の奮戦を記した後、六人の敵が土屋に鑓を突き立てたところ「土屋をふびんに思召候や、はしりより給ひ、左の御手にて鑓をかなぐり、六人ながらきりふせ給ふ。勝頼公へ鑓を三本つきかけ、しかも御のどへ一本、御わきの下へ二本つきこみ、おしふせまいらせて、御くびをとる」、となっている（巻二十・

Ⅱ-179)。最後まで奮戦する忠義の土屋のため自ら加勢し、討ち取られる内容である。勝頼が日頃から「国もつ(持)大将なりとも、おしつめられ、はらをきるハ口おし(惜)き儀なり。あひてさ(相手)へあるに付てハ、きりじに(斬死)」と言っていたことを記し(巻二十・Ⅱ-179)、討ち死にが公言通りであることを明らかにしている。「つよすぎたる」勝頼の面目を保つ記載である。なお、勝頼一行の最期は、信勝の部下で一行に追いつけなかった侍が隠れて遠くから見たという目撃談に基づき書かれているとする(二十巻・Ⅱ-179)。甲州崩れに関しては、高遠城で玉砕した仁科、小山田備中(古備中の子)、渡辺金大夫の三名について「はれ(晴)なるうちじに」との記載もある(巻二十・Ⅱ-181)。裏切りが続き、あっさりと滅亡した武田家を見た春日は、勝頼の面目や最後まで戦った信勝や土屋、仁科らの意地を書き残した。

⑧報いとしての死

主君への裏切りである信玄の嫡男義信(太郎)が代表である。川中嶋合戦における采配をめぐり合戦後に親子の仲が悪化し、僧侶の仲介も不調に終わったため、義信は長坂源五郎(長閑の子)と談合し、飯富兵部を頼みとし、かつて信玄がその父信虎を追放したように謀反を起こそうとした(義信事件)。しかし発覚し、座敷牢に入れられ永禄一〇年に自害(または病死)した。高坂は、「さくげん(策彦)」和尚がかつて信玄に話した、「必ズ、りこん(利根)のすぎ(過)たる大将は、無分別にてぶ(不)穿鑿なる故、手柄をもしり(知)給ハねば、ぶ(不)手柄をも御存知なし。いらざる所につよミ有りて、家につたふ(伝)る家老などを、とがもなきにくミ(憎)、親ふかう(不孝)にして、父ともなかあし(仲悪)うなり、ひがう(非業)に身をやぶり給ふ物にて候間、御ぞうし(曹司)幼少之時、御もり(守)肝要也」という言葉を引き合いに出し、「そのごとくに、太郎義信公はほろび(滅)なさるゝ」と評する(巻四・Ⅰ-116)。利根過ぎたため、かえって周囲への配慮ができなくなり非業の最期を迎えた、ということである。単に謀反を起こしたというにとどまらず

詳しく原因・背景分析するのが高坂である。この事件は飯富の弟の飯富三郎兵衛が義信・飯富の謀反の動きを察知して信玄に報告して発覚し、飯富もこの件で成敗されるが、三郎兵衛が信玄に報告する際、飯富について「太郎殿御分別ちがい候ハヾ、若きとの（殿）に御異見申上、御きゝ（聞）なくは、御前にて腹を可レ仕（つかまつるべく）候」と述べ、信玄は涙を流し、心打たれている（巻十一・I-354）。事件後、信玄は三郎兵衛に対して山形に名字を変えさせるとともに（巻十六・II-24）、後に曽根孫二郎が兵部の名乗りの許可を求めた際も、飯富の件を理由に許可しなかった（結果、曽根は内匠を名乗る）（巻十六・II-23）。信玄の飯富への態度は極めて厳しい。なお、高坂は、もともと信濃攻略の先鋒として甘利備前、板垣信形、小山田備中（古備中）および飯富の四人があたっていたが、甘利、板垣、小山田が討ち死にしたため、「飯富兵部計（ばかり）、壱人のこり（残）候て、其身にまんじ（慢）、信玄公へ我まゝ（わがまま）仕、万事をおのれが仕リてしんず（信）る様に候て、こわいけん（強意見）申に付、「信玄公、御聞なく候」とて、太郎義信公廿（にじゅう）八歳の御時、異見申、「父信玄公を御ころし（殺）候へ」とすゝめ申」した（下巻中・II-376）と、ここでも原因・背景分析をしている。他に主君への裏切りとして、甲州崩れの際、徳川家康に内通した穴山梅雪もとり挙げる。穴山は武田家滅亡後、家康の盟友織田信長が本能寺で横死した際、和泉国の堺におり、本国に逃げ帰る際、落ち武者狩りに遭い「ぞう（雑）人の手」で首を取られるという武士として不名誉な最期を迎える。春日は、高坂が生前常々言っていた「主君へぎやくしん（逆心）の人、三年ろくにて居たる事なし」という言葉を引き合いに出している（巻二十・II-174、同-184）。次に落合彦助の事件を見てみたい。信玄の弟である武田勝用軒の被官であった落合は百姓との間に訴訟を起こしたが負け、土屋平三郎ら訴訟担当の奉行衆の悪口を言いふらしていた。そこを処罰されそうになり、勝用軒らの計らいで助けられたものの、長坂源五郎の陰の助力を得て土屋を逆恨みし、土屋を暗殺し、国外へ逃亡する。そこで、信玄の意を受けた長坂長閑、跡部が刺客を放ち、その刺客らは腐敗した落合の首なるものを甲府に持ち帰った（巻十七・II-60）。奉行を、しかも何ら落ち度のない人物を

殺害するという、裁判制度、さらには武田家への挑戦ということで国外まで追及の手が及んでいる。ただ、実は刺客らは落合を殺害しておらず、落合はその直後の川中嶋合戦で上杉方として現れ、討ち死にしている（合戦後、件の刺客らは行方をくらました）（巻十四・I–485、巻十七・II–69）。⑧の最後も信玄を挙げる。信玄は希庵という僧を甲府に呼び寄せようとしたが来なかったため、秋山伯耆に命じ、その秋山は松沢源五郎、小田切与助、林甚助の三人に指示して希庵を殺した。すると、「五十日がうちに狂気さし、或ハてんごうをかき、落馬し、三人ながら死するなり。信玄公も次年、天正元年四月十二日に御他界」となった（「てんごうをかき」は落ち着きを失い、という意味か）。この件について春日は、信玄が物を書く際、「かざりなく仕候へ供、私に相似たる事、或ハ偽に相似たる儀をかき候へば、必ミやうがなきものなり」と言っていたのを高坂から聞いていたので、「何事も聞定次第、有のまゝ書付申候」と述べている（下巻下・II–508）。仏道に対する非道な行いの報いとして隠さず描いた。

⑨悪口・喧嘩・怠慢を理由とした成敗による死

甲陽軍鑑には裁判（公事）の記載も多い。具体的な内容が多く、武田家の実情や戦国時代における訴訟制度を知る上で貴重な資料である。若き日の高坂の裁判、宗派の違う百姓夫婦間の子の出家をめぐる裁判といった武士以外のものもあるが、ここでは喧嘩の他、悪口・怠慢という武士として無意味な行動に対する裁判による成敗を紹介する。まず、大勢で鉄炮まで使用した合戦まがいの喧嘩を起こし多くの死者を出した件では、相手を殺害したかも十兵衛、山下甚助、安沢彦介の三名が成敗された（巻十六・II–26）。赤口関左門と寺川四郎右衛門の喧嘩は、武田家中でどちらの態度が正しいか広く議論となったものの、信玄は胸倉をつかみつかまれる状況となりながら、どちらも刀を抜かなかったことが「わらべや、扨は町人の仕ルいさかい」であり、「他

国のひはん(批判)もいかゞ。きわめては、晴信が家のきず(傷)に成ル事なり」といって両者を成敗した（巻十七・Ⅱ−39）。喧嘩は成敗という国法（甲州法度之次第一七条）であるが（巻一・Ⅰ−39）、喧嘩をしたからという形式的な判断ではなく、武士としての道理の議論を経た上、武田武士らしく戦わなかったという理由で成敗となっている。なお参考としてあげると、多田久蔵は、一条右衛門大夫や福田という武士と二度喧嘩をしているが、一条とは多田が功績ある多田淡路の子孫であることから、福田とはそもそも福田がその下女を利用した恐喝を働こうとした結果（なお、福田は多田に斬られ死亡）であることから、それぞれ成敗されずに済んでいる（巻十六・Ⅱ−28）。この例のように喧嘩で成敗されない例は稀ではない（巻七・Ⅰ−168、巻十二・Ⅰ−414、巻十六・Ⅱ−23、巻十七・Ⅱ−59）。増城(ぞうじょう)源八郎の裁判では、増城はかつて長沼長介・長八兄弟の仇討ちに助太刀した際、手柄を独り占めしようとして長沼兄弟と裁判になったものの敗訴した人物だが、川中嶋合戦で自らが逃亡したことをさておいて同僚の古屋惣次郎が逃亡したと訴え出たところ、信玄は「おと年(一昨)、長沼兄弟にも心のむさき事を申かけ、無理成(なる)公事をいたす。又此度も、かくの分なれバ」といって逆さ磔とした。「「我が身の手柄をいわん(言)とて、申合たるちかづき(近)をあしくいひ(悪)、あるひはほうば(傍)ひをさゝえ(障)、はた物(機)にあがる。末代迄、武士の見せしめなり」とて、増城源八郎を上下万民にくまぬ(憎)ものはなかりけり(者)」（機物にあがるすなわち磔にされる）とのことである（巻十七・Ⅱ−46）。萩原助四郎は、日頃から鑓の功名は「一度ハすくなし(少)、三度ハおゝし(多)、二度よいころなり」、と言っていた通り、鑓で二度高名を遂げるなどした後、「いのちをつゝしみ(慎)、大事の時仕らん」といってまるで働くなり怠慢故で成敗されている（巻十・Ⅰ−292、巻十六・Ⅱ−30）。なお、実際には成敗されなかったものの、長篠合戦の戦後処理として、穴山梅雪および武田典厩（信豊）を切腹させるよう高坂が勝頼に意見したことも参考として挙げておく。甲陽軍鑑の記載からは何故典厩（信豊）が責任を問われるのかわからないが、穴山は合戦の際、「せりあ(競合)ひなくひき(引退)の」き（巻十九・Ⅱ−114）、撤退にあたり勝頼に対し「信玄公

以来ノ家老の衆ことぐ〳〵くころし給ふ」と雑言を吐いていた（上巻・Ⅱ-285）。

⑩不覚の死

まず板垣信形である。板垣は信濃攻略における武田軍最主力の「弓矢かうしや」であり、信濃国上田原合戦で序盤に攻勢をかけ村上軍を一旦撃退する。しかし、「当未ノ正月より、分別うわ気になられ、備ことぐ〳〵ちがい候故、味かたを引はなれ、敵のはいぐんして、其後又、来るべき方へ行きて、然もそなへのおもてにて、首をぢつけんある所」、「油断いたされ候故、家中に弓矢かうしやの武士共モ、上をまなぶ下なれば皆油断して、敵にしかけられ、あハてゝる道具をとり、備たつる事もなき間に」討ち取られた（巻九・Ⅰ-270）。次は日向藤九郎である。武蔵国松山城攻めの際、武田軍は少し前に開発された「竹たば」なる竹を束ねて作った防弾・防矢兵器を用いて攻めていたが、日向は城の水の手を断とうと「竹たば」を出たところを銃撃されて死亡した（巻十一・Ⅰ-340）。三番目に上野国膳城攻めにおける原隼人之助である。城への攻撃を翌日に控え武田軍が防具を解いて待機していたところを膳城方から攻撃され、それはすぐ撃退したが、武田軍は防具をつけず（「すはだ」で）その勢いのまま勝頼の制止を振り切る形で城攻めにかかり、落城させている。この戦いで原は城への一番乗りを果たすが、頭部に重傷を負い、甲府に戻り死亡した。春日は、「城ぜめを、すはだにて一時ぜめになさるゝ事、信玄公の御代にもつゐに是なし。よその家にもさのミこれなく候。太平記にも、しかとすはだの城ぜめハ見へず候」、と異常さを指摘している（巻二十・Ⅱ-165）。この三者の死をめぐる出来事について、統率上、装備上の不覚であることを分析的に記載しており、「にげ弾正」とその甥の面目躍如である。ただし、戦場での不覚の死で武田武士個人が明示的に批判されているのは板垣くらいである（この日向も原も批判されていない）ことに注意を要する。その板垣も、別に「めいよの侍大将板がき信形うち死也」と評されて

いる（巻九・Ⅰ-271）。

⑪その他

まず信玄の父信虎である。信虎は信玄死後領国内に戻り、勝頼や家老衆らと対面するが、そこで高坂に関して「百姓を大身には、信玄の分別ちがひなり」と言ったり、刀を抜き、かつて「くどう源左衛門」を名乗っていた内藤修理のいる前で「此刀にて五十人にあまり御手うち（討）なされ候中にも、内藤修理となるやつの兄を、けさがけにきりたる（袈裟懸斬）」と言うなど、「座中ことぐく（凍）かうり、目もあてられぬもやう（模様）」を作り出した。長坂長閑の計らいにより、対面もあえて信濃国伊奈（那）で行い、対面後も伊奈に逗留させ続け、死については「信虎公やがて御他界也」とのみ記載し（巻十九・Ⅱ-109）、記載上も信虎を冷淡に扱っている。なお、高坂は長坂に対し、基本的に君側の奸として厳しい評価をしているが、信虎を伊奈にとどめ置いたことについては「長坂長閑分別能故（よき）也」と珍しく称賛している（巻十九・Ⅱ-110）。ちなみに、それより以前に長坂と内藤が口論した際、内藤が「信玄公にむすこ（息子）の源五郎をころ（殺）され申、そのねたミ（妬）なり」と言ったのに対し、長坂は「あに（兄）を信虎公の御てうち（手討）にきり（斬）られ申、そのねたミに、信玄公へ種々けいは（軽薄）くをいたし」と応酬した（巻二・Ⅰ-94）。一族の成敗は侮蔑の対象である。次に野村源左衛門の件を挙げる。野村は信虎にえりすぐられた武者の一人であったが、信玄が一二歳の時、一八歳の若者とのいさかいで斬りつけることもできずあっさり斬り殺されてしまう。野村は近接戦に弱い長刀であったことから、信玄は「大かう（剛）のつわもの、てもなくし（手死）するハ、あしき（悪）道具のゆへ（故）」と考え、成人してから長刀を禁止した（巻七・Ⅰ-165）。一つの部具の禁制のいきさつとして記載している。なお、この禁制は後に、信玄自身が部下に意見を求めた上解除している（巻七・Ⅰ-166）。三つ目に北地五郎左衛門の件を挙げる。山形三郎兵衛の監督下にあった北地は「知行所、悪所也」といって山形に訴えようとした

が、取り次ぎ役の大場民部左衛門は、元伊勢牢人である北地を「他国ノ者」と侮り取り次がなかった。北地は書き置きを残して抗議の切腹をしようとしたところ、同僚らに取り押さえられたため腹は切れなかったものの、「腹をきるなどゝ云事を侍が申出して、二度ととまる男が有物か」と言って、刀が届いた膝上を散々に斬りつけ、その傷で三日後に死亡した。それを知った山形はすみやかに信玄に報告し、信玄は詳らかに審理をした上大場の一族をことごとく成敗し、「日光・月光いづれか、ハたくしニてらし給ふぞ。ハたくしなくてらすニ日かげの有ルハ、おのれ〳〵がとがなり」、「少もわたくしなきやうニ、侍の事ハ不レ及レ申、下々迄もうつたへを申さバ、つげきたれ」と言って、北地の弔われた寺に金子を届けた（巻八・I-197）。勝頼の不当成敗に関するものとして、春日は、「勝頼公忠節の侍衆御成敗之事」と題して、孕石忠弥について「「かやうに、大かうの武士を、少の事にて御せいばいあるハ、おしき事なり」と、諸人ひはんなり」、曽根与市之助の成敗について「何のとがもさのミなきに、かやうなるは、長坂長閑・跡部大炊助となか悪敷故」、とそれぞれ評価し、落合市之丞について「度々の武かうあり」、「勝頼公御あてがいあしき故、他国仕」ったが、母を人質にとられ帰国したところを勝頼が「からめとらせて、見ごりのために、しばりくびをきれ」と言って成敗させた経緯を記載している（巻二十・II-155）。最後に怨霊に関するものを挙げる。甘利左衛門尉は「父備前におとらぬ武弁の人」で、戦死した父を継ぎ、一三歳で早くも初陣を遂げ、信玄から感状を九通受けるなど活躍を続けたが、三一歳のある時、馬の足を見ようとして馬に頭を踏まれて死亡する。この際跡部上野と信玄の名前を出して何かを伝えようとした（巻九・I-250、巻十六・II-26）。将来武田家の中心となることが期待された若く有能な武士の奇怪な死に様であり、「是ハ武田の久しきおんりやうなり」と記載がある（巻九・I-250）。

三　安全・危機管理思想のまとめ

高坂は戦争のリスクとして家老衆の戦死すらも当然のように考えている。だからこそ「遠慮」の信玄を高く評価し、時には信玄に対しても意見し、強さのあまり遠慮を欠く勝頼を批判する。遠慮であることと大敵と決戦をしないこと、極力「けが」が起きないようにすることが高坂の戦略上の基本的な思想である。春日も、勝頼の強さと、北条氏まで敵となったことを武田家滅亡の要因として描いていることなどから、高坂の基本的思想を引き継いでいるといえる。そして戦争にはリスクがある（それこそ命を賭している）からこそ、高坂・春日とも戦死した者をその失態故に批判することはほぼない。戦闘における失態を失態として評価しない考え方がうかがえる。戦術面における失態についても同様である（高坂は小田原攻めや長篠合戦等で戦略面の批判をしているにも関わらず、戦術批判とみられるのは勝用軒の遠江国森合戦（巻十九・Ⅱ-102）くらいである。ここまで戦術批判を避ける理由は何であろうか。記して研究を待ちたい）。現代的にはヒューマンエラーを罰しないという考えが近いか。規律違反への峻厳な態度とは対照的である。また、死も時として不可欠あるいは必要な犠牲という扱いをしている点、死亡事故は絶対避けたい現代の非軍事の大部分の領域と考え方が異なるが、ただ、安全に絶対はないという根本思想においては通じている。突然の死が非日常化した結果、死は絶対避けたいという思想が行き過ぎ、安全は絶対でなければならない、絶対安全が当然であるといった安全神話がはびこる現代、忘れがちな根本思想である。

武田家も、各部隊も人が支えるものであり、大事なものは有為な人材である。人材確保のため、赤口関・寺川裁判の件のように他国の評判も意識する。人がいなくなることで組織に穴が開かないことが理想だが、いろいろな場面でどうしても穴が開いてしまう。高坂は、日頃も世代交代を、戦争時でも部隊長戦死後の穴埋めを

意識している。そして、組織に穴が開くことを不可避と考えるからこそ、精神面での組織の維持の視点も一層重要となってくる。主を失っても隊を崩さず踏ん張ること、主の首を取り返すことを重視するのは最たるものであろう。さらに、時として命よりも意地が優先する。現代的に考えれば、死者の首よりも二次被害防止を、死ぬよりも次の戦闘への参加を優先させる方がよほど合理的と思えるが、当時はそうではない。戦略・戦術を度外視した精神面での勝ち負けも大事なのである。精神面を大事にするからこそ武田家の威光となり強い国造りにつながる。ただし、精神面の強さが空回りした結果である勝頼の遠慮を欠く強さや、戦略・戦術的勝ち負けを無視するような武田武士の意地が長篠合戦の壊滅的敗北を招いたことにも触れざるを得ない。

精神面を重視することの一面として、規律の重視が挙げられる。高坂は数々の裁判も審理経過まで詳しく記し、信玄の裁判がいかに正しかったのか伝えようとする。謀反は重罪という一貫した考えを持ち、嫡男義信にも同情はない。恥ずべき武士については無様な最期や処刑後の民衆からの批判をも書き記す。長篠合戦では無謀な決戦を挑んだ勝頼を批判しつつも、決戦に殉じた土屋や馬場の意地をしっかりと書き残し、戦後の責任処理については、勝頼に決戦を勧めた長坂ではなく決戦せず退却した穴山を切腹にするよう主張する。「御はた（旗）・たてなし（楯無）ぞ、明日の合戦のばすまじき（延）」と武田家伝来の旗と楯無鎧に誓って合戦に踏み切った（巻六・I-161）以上は戦うことが正しいのである。武田家の規律ということでは、諏訪家の勝頼は実質があっても形の上で家を継げない。ただ、規律といっても形式的な規則遵守のみではない。悪口、怠慢も度を越せば成敗理由となるし、喧嘩成敗の国法には武士の道理や先祖の功績が上書き的に介入する。様々なものが武田家の規律を形作り、戦国のサバイバルに対応しようとする。

高坂はかなりの原因分析者であるが、様々なことに目を配っているということで「遠慮」かつ「日かげ（陰）」のないように努める信玄と通じるものがある（この点、勝頼のみならず無分別・不穿鑿の義信とも対極的である）。

高坂と春日は記録に残す形で、小幡惣七郎や北地の弔いをする信玄と同様、死にもよく目を配っている。人の優秀さは往々にして見えにくいものであるが、高坂は武功も含め事実を淡々と記載することで各武士の良い点、悪い点を現在に残している。甲陽軍鑑をもとに各武士に想像を致すとき、敵の首を取った、一番乗りを果たした、という単純すぎる指標で良き武士かどうか決めつけられないことが実感できる。現代に通じる単純な成績主義の問題点を改めて感じることができるのではないだろうか。

ところで甲陽軍鑑は死の描写部分に限らず現代でも通用する安全・危機管理思想ばかりである。本稿著者はかつて、『甲陽軍鑑から学ぶ医療安全』[6]とする論稿集を作成した。全一三話あり、医療現場で活用している。現代の医療安全は甲陽軍鑑に学ばなければいけないことが多い。四〇〇年以上の時を経て、戦争の形は変わり、科学技術も進歩したが、人間という生き物自体は全く変わらない。人間はいつまでもミスをする生き物である。組織や命のリスクに向き合い続けた高坂が勝頼の反省材料として残そうとした甲陽軍鑑。現代でもそこから学べることは多い。

■文献

1 酒井憲二編著『甲陽軍鑑大成　第一巻本文篇上』、汲古書院、一九九四年
2 酒井憲二編著『甲陽軍鑑大成　第二巻本文篇下』、汲古書院、一九九四年
3 酒井憲二編著『甲陽軍鑑大成　第四巻研究篇』、汲古書院、一九九五年
4 黒田日出男「『甲陽軍鑑』をめぐる研究史：『甲陽軍鑑』の資料論」、立正大学文学部論叢一二四号、二〇〇六年
5 平山優「長閑斎考」、戦国史研究五八号、二〇〇九年

6 奥津康祐「甲陽軍鑑から学ぶ医療安全」（第1話〜最終話：メヂカルめぢ子医療安全奥義集内）、二〇一五年、http://www.okutsukosuke.com/medico/

（おくつ・こうすけ　東京女子医科大学医学部助教）

Reflections on safety and crisis management from reading descriptions of the deaths of the Takeda family's samurais in *Koyo-gunkan*

Kosuke Okutsu

Koyo-gunkan is a record of the Takeda family as a *daimyo* during the Japanese Warring States period. The authors are presumed to be Kosaka Danjo and Kasuga Sojiro. It is mainly concerned with the military, and so it records how several samurais belonging to the Takeda family died. These descriptions of their deaths can be classified into 11 types: *(a)* death to become precious, *(b)* honorable death during war, *(c)* unavoidable death, *(d)* death of a person in charge, *(e)* death resulting in a generational change, *(f)* death in memory of a capable commanding officer who died, *(g)* death due to the honor of a samurai, *(h)* death as retribution, *(i)* death by execution for vilification, private fights, or neglect of duty, *(j)* death caused by carelessness, and *(k)* death because of other reasons.

After classification, some observations on safety and crisis management were noted. Firstly, because serious risks were always present, including the deaths of the chief retainers, a samurai's mistakes during war were not considered to be their fault. Secondly, the Takeda family was conscious of filling in the blanks in the organization, caused by deaths. Thirdly, the samurai spirit was tremendously valued. During war, if a superior was killed and his head taken away, the subordinates sought to get back the head above all else. Samurais also often ignored strategies and tactics, and chose death to retain their samurai pride. Fourthly, samurais were executed if they committed shameful acts like rebellion, vilification,

private fights, or neglect of duty. Strict discipline was maintained, which involved several factors such as their laws, *bushido*, achievements of their ancestors, and was applied flexibly depending on the individual case or man.

Koyo-gunkan was originally written for Takeda Katsuyori, the head of the Takeda family who had suffered a crushing defeat at the Battle of Nagashino, so that he could learn from the successes of his father, Takeda Shingen. As the main author Kosaka faced risks in his organization and life, there is a lot to be studied from their work even today.